



TITLE:

京大広報 No. 609

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 609. 京大広報 2006, 609: 2085-2104

ISSUE DATE:

2006-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196485>

RIGHT:



京大広報

No. 609

2006. 2



フィールド科学教育研究センター時計台対話集会を開催
—関連記事 本文2101ページ—

目次

〈大学の動き〉

平成18年度入学者選抜学力試験 (第2次学力検査等)の実施日程	2086
平成18年度入学者選抜学力試験 (第2次学力検査等)の志願状況	2087
平成18年度概算要求内示概要	2088
自衛消防団員に対して感謝状を贈呈	2089
博士学位授与式	2089
平成17年度定年退職教員	2090

〈部局の動き〉

宇治キャンパスで危機管理への取り組みを実施	2093
-----------------------	------

〈寸言〉

道草が生んだ世界	神谷 徹	2094
----------	------	------

〈随想〉

時計台記念館の歴史展示室	名誉教授 応地利明	2095
--------------	-----------	------

〈洛書〉

思いもよらぬこと	森本幸生	2096
----------	------	------

〈保健コーナー〉

鳥インフルエンザの脅威	藤井信孝	2097
-------------	------	------

〈計報〉

総合博物館 平成17年秋季企画展6,500人を突破	2101
---------------------------	------

〈話題〉

フィールド科学教育研究センター 時計台対話集会を開催	2101
-------------------------------	------

京都大学未来フォーラム(第20回)を開催	2102
----------------------	------

〈日誌〉

〈医療技術短期大学部の動き〉	2102
----------------	------

平成18年度専攻科助産学特別専攻入学者 選抜試験を実施	2103
--------------------------------	------

〈お知らせ〉

21世紀COEプログラム公開シンポジウム 「やさしい先端経済分析～先端理論による 経済システムの解剖～」	2103
------------------------------------------------------------	------

河上肇記念講演会	2104
----------	------

大学文書館企画展	2104
----------	------

〈編集後記〉

	2104
--	------

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

平成18年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査等）の実施日程

平成18年度入学試験（第2次学力検査等）を次の予定で実施する。

1. 前期日程試験

月 日	教 科 等	学 部	時 間
2月25日 (土)	国 語	総人「理系」・理・医・薬・農	9時30分～11時
		総人「文系」・文・教育・法・経済「一般」	9時30分～11時30分
	数 学	総人「文系」・文・教育・法・経済	13時30分～15時30分
		総人「理系」・理・医・薬・工・農	13時30分～16時
2月26日 (日)	外 国 語	総人・文・教育・法・経済「一般」・理・ 医「医学科（独・仏・中）・保健学科」・薬・工・農	9時30分～11時30分
		医「医学科（英語）」	9時30分～11時50分
	論 文	経済「論文（論文Ⅰ）」	9時30分～12時30分
	地 理 歴 史	総人「文系」・文・教育・法・経済「一般」	13時30分～15時
	理 科	総人「理系」・理・医・薬・工・農	13時30分～16時
	論 文	経済「論文（論文Ⅱ）」	14時～17時
2月27日 (月)	面 接	医「医学科」	9時～17時30分
		医「保健学科作業療法学専攻」	9時30分～13時30分

2. 後期日程試験

月 日	教 科 等	学 部	時 間
3月13日 (月)	数 学	総人・教育・経済・農「食料・環境経済学科」	9時30分～11時30分
		理・医・薬・工「地球工学科, 建築学科, 物理工学科・ 工業化学科」・農「資源生物科学科, 応用生命科学科, 地域環境工学科, 森林科学科」	9時30分～12時
	論 述	工「電気電子工学科」	9時30分～12時
		工「情報学科」	9時30分～12時30分
	国 語	総人・文・教育・経済・農「食料・環境経済学科」	13時30分～15時30分
	理 科	工「建築学科」※物理のみ	13時30分～15時
		理・医・薬・工「地球工学科, 工業化学科」・ 農「資源生物科学科, 応用生命科学科, 地域環境工学科, 食料・環境経済学科, 森林科学科」	13時30分～16時
	論 述	工「物理工学科」	13時30分～16時
3月14日 (火)	外 国 語	総人（独・仏・中）・文・教育・法・経済・ 医「医学科（独・仏・中）・保健学科」・工「工業化学科」・ 農「資源生物科学科, 応用生命科学科, 食料・環境経済学科, 森林科学科」	9時30分～11時30分
		総人（英語）・医「医学科（英語）」	9時30分～11時50分
	論 文	文・教育・医「医学科」・薬・工「工業化学科」	13時30分～15時30分
		法	13時30分～16時
	論 述	医「保健学科」	14時～17時
	面 接	農「食品生物科学科」	9時30分～11時30分 13時30分～16時30分
		医「保健学科」	13時～16時
		医「医学科」	17時～19時30分

平成18年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査等）の志願状況

志願票の受付は、1月30日（月）から2月7日（火）までの間に、各学部で行われた。

学部別の入学志願者数は、次表のとおりである。

学 部			募集人員	志願者数	倍 率	(参考) 前年度最終			
						募集人員	志願者数	倍 率	
総合人間学部	前期 文理系		105 [△]	378 [△]	3.6	105 [△]	362 [△]	3.4	
			55	198	3.6	55	209	3.8	
			50	180	3.6	50	153	3.1	
	後期		15	257	17.1	15	248	16.5	
文学部	前期		190	577	3.0	190	562	3.0	
	後期		30	385	12.8	30	449	15.0	
教育学部	前期		40	164	4.1	40	150	3.8	
	後期		20	174	8.7	20	211	10.6	
法学部	前期		300	886	3.0	300	922	3.1	
	後期		10	419	41.9	10	363	36.3	
経済学部	前期 一般論		210	784	3.7	210	776	3.7	
			160	503	3.1	160	525	3.3	
			50	281	5.6	50	251	5.0	
	後期		20	704	35.2	20	792	39.6	
理学部	前期		280	857	3.1	280	833	3.0	
	後期		31	878	28.3	31	889	28.7	
医学部	前期		213	618	2.9	213	605	2.8	
			30	338	11.3	30	365	12.2	
	医学科	前期		90	344	3.8	90	324	3.6
		後期		10	155	15.5	10	162	16.2
	保健学科	前期		123	274	2.2	123	281	2.3
		後期		20	183	9.2	20	203	10.2
	看護学専攻	前期		63	142	2.3	63	110	1.7
		後期		7	80	11.4	7	73	10.4
	検査技術専攻	前期		30	77	2.6	30	74	2.5
		後期		7	53	7.6	7	72	10.3
	理学療法専攻	前期		15	39	2.6	15	56	3.7
		後期		3	25	8.3	3	31	10.3
	作業療法専攻	前期		15	16	1.1	15	41	2.7
		後期		3	25	8.3	3	27	9.0
	薬学部	前期		70	184	2.6	70	222	3.2
				10	131	13.1	10	151	15.1
		薬科学科	前期		44	114	2.6		
後期				6	74	12.3			
薬学科		前期		26	70	2.7			
		後期		4	57	14.3			
工学部	前期		857	2,224	2.6	857	2,166	2.5	
			98	988	10.1	98	923	9.4	
	地球工学科	前期		166	465	2.8	166	353	2.1
		後期		19	248	13.1	19	225	11.8
	建築学科	前期		72	238	3.3	72	243	3.4
		後期		8	117	14.6	8	120	15.0
	物理工学科	前期		211	492	2.3	211	539	2.6
		後期		24	214	8.9	24	195	8.1
	電気電子工学科	前期		117	326	2.8	117	338	2.9
		後期		13	123	9.5	13	98	7.5
	情報学科	前期		81	240	3.0	81	155	1.9
		後期		9	97	10.8	9	102	11.3
	工業化学科	前期		210	463	2.2	210	538	2.6
		後期		25	189	7.6	25	183	7.3
農学部	前期		233	581	2.5	233	590	2.5	
			67	719	10.7	67	703	10.5	
	後期	資源生物科学科		19	168	8.8	19	168	8.8
		応用生命科学科		9	119	13.2	9	114	12.7
		地域環境工学科		11	141	12.8	11	108	9.8
		食料・環境経済学科		9	110	12.2	9	110	12.2
		森林科学科		12	129	10.8	12	159	13.3
		食品生物科学科		7	52	7.4	7	44	6.3
		合 計		2,829	12,246	4.3	2,829	12,282	4.3
		前期		2,498	7,253	2.9	2,498	7,188	2.9
後期			331	4,993	15.1	331	5,094	15.4	

(注) 法学部（後期日程）と経済学部（後期日程）は、外国学校出身者のための選考の募集人員20名以内と10名以内とを除く。

平成18年度概算要求内示概要

新規要求

1. 公共政策教育部（専門職大学院の設置） 公共政策専攻 専門職課程 40人
2. 経営管理教育部（専門職大学院の設置） 経営管理専攻 専門職課程 60人
3. 薬学部（学部の改組） 薬科学科 50人
薬学科 30人
4. 特別教育研究経費

概算要求区分	部 局 名	事 項（事 業） 名
教 育 改 革	薬学研究科・薬学部	薬学フロンティア教育プログラム開発
研 究 推 進	霊 長 類 研 究 所	リサーチ・リソース・ステーション（RRS）－環境共存型飼育施設による新たな研究用霊長類創出プロジェクト－
	工学研究科・工学部	桂キャンパスにおける研究・教育活動の環境負荷の低減化事業
	化 学 研 究 所	超臨界二酸化炭素ナノポーラスエラストマー創製事業
	再生医科学研究所	再生医科学研究所附属幹細胞医学研究センターにおける、新たなES細胞(臨床応用ES細胞)樹立のプロジェクト研究
	化 学 研 究 所	物質合成研究拠点機関連携事業（名古屋大学、九州大学）
	防 災 研 究 所	地震火山噴火予知計画研究事業
	ウ イ ル ス 研 究 所	新興・再興ウイルス感染克服研究連携事業
	東南アジア研究所 アジア・アフリカ地域研究研究科	地域研究統合情報センターの設置 －地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進－
拠 点 形 成	生 存 圏 研 究 所	生存圏科学ミッションの全国・国際共同利用研究拠点形成
	防 災 研 究 所	災害に関する学理と防災の総合的対策のための研究推進事業
	基 礎 物 理 学 研 究 所	基礎物理学分野横断型全国共同研究
	数 理 解 析 研 究 所	無限解析共同研究
	原 子 炉 実 験 所	原子力科学の先導的な応用分野の開拓
	霊 長 類 研 究 所	霊長類の生物学的特性の学際的研究
	放射線生物研究センター	放射線生物学研究の推進拠点
	生態学研究センター	生態学における共同研究
連 携 融 合 事 業	医学研究科・医学部	ポストゲノム研究の国際共同研究事業
	経 済 研 究 所	先端政策分析連携推進機構の設置
	法学研究科・法学部 経済学研究科・経済学部	公共政策分野における実践的高度教育設備
特 別 支 援	経済学研究科・経済学部 工学研究科・工学部	経営管理分野における自学自習学習支援システム

学年進行分

1. 学年進行教員相当数 5人
医学部・保健学科 5人（17年度からの繰延戻し分）

自衛消防団員に対して感謝状を贈呈

1月18日（水）午前11時30分から本部棟5階大会議室において、自衛消防団員に対して総長からの感謝状および記念品が木谷雅人理事（総務・人事・広報担当）より贈呈された。

感謝状は、5年継続して自衛消防団員を務めた者に贈られることになっており、今回、感謝状を受けた団員は、渡部正治（薬学研究科）、垣田明彦（農学研究科）、奥村 東（企画部）の3氏である。



今回表彰を受けた（左から）奥村さん、渡部さん、垣田さん

博士学位授与式

1月23日（月）午前10時30分から、時計台記念館国際交流ホールにおいて、尾池和夫総長、教学担当の理事をはじめ、各研究科長・学舎長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記（平成17年11月24日付、同18年1月23日付）が手渡された後、総長

の式辞があり、午前11時30分終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。

総長式辞は総長室ホームページをご覧ください。

http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/01_sou/060123_1.htm

学 位	平成17年11月			平成18年 1 月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士（文学）	10	6	16	5	2	7
博士（教育学）	—	1	1	2	—	2
博士（法学）	—	—	—	—	—	—
博士（経済学）	4	1	5	1	4	5
博士（理学）	7	—	7	3	2	5
博士（医学）	7	2	9	8	2	10
博士（社会健康医学）	2	—	2	1	—	1
博士（薬学）	—	—	—	—	—	—
博士（工学）	7	5	12	4	4	8
博士（農学）	5	5	10	3	8	11
博士（人間・環境学）	3	3	6	6	—	6
博士（エネルギー科学）	1	1	2	—	—	—
博士（地域研究）	—	—	—	—	—	—
博士（情報学）	5	—	5	4	1	5
博士（生命科学）	4	—	4	1	—	1
博士（地球環境学）	—	—	—	2	—	2
計	55	24	79	40	23	63



11月24日付 博士学位授与者



1月23日付 博士学位授与者

平成17年度定年退職教員

京都大学定年規程により、次の教員（教授51名、助教授4名、講師2名、助手6名）が、本年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文 学 研 究 科	中 村 紘 一	文献文化学専攻 欧米語学・欧米文学講座	アメリカ文学，特に，メルヴィル，南部文学，エドマンド・ウィルソンの小説，批評に関する研究
〃	庄垣内 正 弘	行動文化学専攻 言語学講座	チェルク語研究，とりわけ古ウイグル語の言語学的・文献学的研究
〃	内 井 惣 七	現代文化学専攻 現代文化学講座	科学の歴史および現代科学の実態を踏まえた上での，科学の認識論的問題と社会的倫理的問題の研究
法 学 研 究 科	木 村 雅 昭	法政理論専攻 政治行政分析講座	国家に関する歴史社会学的研究
経 済 学 研 究 科	本 山 美 彦	経済動態分析専攻 比較制度・政策講座	グローバル資本主義が生み出す世界的・国内的・地域的不均衡の具体的な姿をえぐり出すことを課題とする研究
〃	古 川 顯	経済動態分析専攻 金融・財政講座	金融政策の波及メカニズムに関する理論的・実証的研究
理 学 研 究 科	今 西 英 器	数学・数理解析専攻 多様体論講座	多様体上の幾何構造，とくに葉層構造の定性的性質についての研究
〃	井 川 満	数学・数理解析専攻 解析学講座	物体による波動方程式に対する散乱問題の研究
〃	山 田 耕 作	物理学・宇宙物理学専攻 物性基礎論講座	相関の強い電子系の理論的研究
〃	水 崎 隆 雄	物理学・宇宙物理学専攻 物質物理学講座	超低温における量子凝縮系の研究
〃	堀 内 昶	物理学・宇宙物理学専攻 核物理学講座	原子核の構造と反応に関する理論的研究
〃	舞 原 俊 憲	物理学・宇宙物理学専攻 宇宙構造学講座	宇宙物理学の観測的研究
〃	竹 本 修 三	地球惑星科学専攻 固体地球物理学講座	固体地球物理学・測地学の研究，とくに地球潮汐・地球内部ダイナミクスの研究
〃	岡 田 篤 正	地球惑星科学専攻 固体地球物理学講座	活構造（とくに活断層）・第四紀地殻運動・地形発達等に関する研究
〃	木 田 秀 次	地球惑星科学専攻 大気圏物理学講座	気象・気候の数値シミュレーションおよび大気・水圏・土壌・植生の物質循環システムに関する研究
〃	瀬戸口 烈 司	地球惑星科学専攻 地球生物圏史講座	極東アジアにおける中生代哺乳類に関する古生物学的研究
〃	梶 本 興 亜	化学専攻 物理化学講座	化学反応における反応場の影響に関する研究（クラスターの化学・超臨界流体中の基礎過程）
〃	山 内 淳	化学専攻 物理化学講座	電子のスピンを分光学的あるいは物性論的に追求し，原子・分子・物質の構造・物性・反応を解明する。
〃	米 井 脩 治	生物科学専攻 動物科学講座	放射線や活性酸素によって生じるDNA損傷の修復機構および細胞の酸化ストレス応答の機構の研究
〃	黒 河 宏 企	附属天文台	太陽表面爆発現象の観測的研究

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
理 学 研 究 科	神 谷 英 利	地球惑星科学専攻 地球生物圏史講座	化石の硬組織の微細構造と進化に関する研究
医 学 部	川 寄 伸 子	保健学科 検査技術科学専攻	生体防御因子としての血清レクチンおよびがん細胞表面の糖鎖リガンドの構造と機能に関する研究
薬 学 研 究 科	河 合 明 彦	生命薬科学専攻 生体分子薬学講座	ウイルスの複製の仕組みおよび病原性に関する生化学的、分子生物学的研究とワクチンへの応用
工 学 研 究 科	齋 藤 敏 明	社会基盤工学専攻 地殻工学講座	資源開発工学，岩盤工学，地下空間工学に関する研究
〃	青 山 吉 隆	都市社会工学専攻 都市社会計画学講座	都市地域計画の数理的研究
〃	山 品 元	機械理工学専攻 生産システム工学講座	スケジューリングと在庫管理，コスト工学，設備管理とリスク管理，品質企画，需要予測とサービス部品の管理
〃	芹 澤 昭 示	原子核工学専攻 核エネルギー工学講座	核エネルギー変換工学，熱流体工学，混相流工学，環境・機能流体等に関する研究
〃	長 村 光 造	材料工学専攻 材料機能学講座	相転移の機構解明および材料組織制御とその機能性の最適化に関する材料物理学的研究
〃	光 藤 武 明	物質エネルギー化学専攻 触媒科学講座	新規遷移金属錯体の創成と触媒機能に関する研究
〃	小 川 欽 也	マイクロエンジニアリング専攻 構造材料強度学講座	航空宇宙材料・構造および機構の動的非線形応答に関する研究
〃	武 田 英 徳	航空宇宙工学専攻 航空宇宙基礎工学講座	回転流体および太陽系形成に関する問題の数値解析的研究
〃	堀 内 俊 壽	電子工学専攻 電子物性工学講座	薄膜物性工学，X線分光学，強誘電体工学，表面界面工学，光電変換工学
農 学 研 究 科	堀 江 武	農学専攻 作物科学講座	作物の生長予測モデルの開発，地球温暖化の食料生産への影響予測および途上国の稲作改善のための地域研究
〃	野 淵 正	森林科学専攻 森林生産学講座	樹木の成長と老化に関する機能木材解剖学的研究
〃	松 本 孝 芳	森林科学専攻 生物材料工学講座	高分子およびコロイド分散系の構造と物性，レオロジー，生物繊維の構造と物性
〃	佐々木 義 之	応用生物学専攻 動物遺伝増殖学講座	家畜の量的形質に関する統計遺伝学的・分子生物学的研究
〃	櫻 谷 哲 夫	地域環境科学専攻 生産生態科学講座	熱帯の農業気象に関する研究
〃	笈 田 昭	地域環境科学専攻 生物生産工学講座	農業機械とテラメカニックスに関する研究
〃	角 谷 忠 昭	応用生命科学専攻 生物機能化学講座	生体膜機能の物理化学的・電気化学的研究，界面電荷移動過程の電気化学的研究
〃	石 田 定 顕	応用生物学専攻 動物機能開発学講座	乾燥・亜乾燥地域における植生・遊牧家畜・飼養システムの地域特性に関する調査研究
エ ネ ル ギ ー 科 学 研 究 科	吉 川 榮 和	エネルギー社会・環境科学専攻 エネルギー社会環境学講座	原子力計装制御・安全工学，マンマシンシステム学およびエネルギー情報学に関する研究
〃	塩 津 正 博	エネルギー応用科学専攻 応用熱科学講座	「膜沸騰熱伝達」「高温液体Naの熱流動」「超流動液体Heの熱流動」「超電導マグネットの冷却安定性」
情 報 学 研 究 科	松 尾 敏 郎	通信情報システム専攻 通信システム工学講座	磁気圏プラズマ中に於けるホイスラーモード波の伝搬に関する研究

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
化 学 研 究 所	小 松 紘 一	物質創製化学研究系	パイ共役系の構造有機化学に関する研究
〃	糴 谷 信 三	材料機能化学研究系	高分子材料化学, 特にゴム弾性体の反応, 機能化, 構造と物性の研究
人文科学研究所	宇佐美 齊	文化生成研究部門	フランスの詩学, とくに近代詩のテキストと詩法に関する研究
再生医科学研究所	池 内 健	附属ナノ再生医工学研究センター	関節のバイオメカニクス・潤滑および血管内治療機器に関する研究
エネルギー理工学研究所	督 壽 之	附属エネルギー複合機構研究センター	(熱電子 MHD 核融合) 発電に関する研究
生存圏研究所	伊 東 隆 夫	生存圏診断統御研究系	植物細胞壁の構造と構築機構の解明に関する研究
防 災 研 究 所	友 杉 邦 雄	附属水資源環境研究センター	河川水文学と水資源工学に関する研究
ウイルス研究所	速 水 正 憲	附属感染症モデル研究センター	H I V / H T L V とその類似サルウイルスの分子系統解析とサルを用いた病原性の分子基盤とワクチン開発研究
経 済 研 究 所	佐 和 隆 光	附属金融工学研究センター	経済現象の統計的分析手法の開発とそれらの特性解明, 日本経済の構造分析, エネルギー・環境経済学の研究
原子炉実験所	西 牧 研 壯	原子力基礎工学研究部門	放射性廃棄物の処理処分にに関する工学的研究
〃	松 山 奉 史	粒子線基礎物性研究部門	粒子線による機能性高分子の創成と物性および高品位二次ビームの発生と利用に関する研究
〃	上 原 進 一	原子力基礎工学研究部門	核放射線計測法の研究開発, 原子力利用に関する情報環境学
〃	高 田 實 彌	原子力基礎工学研究部門	希土類元素と植物の関わりについての総合的研究
霊長類研究所	茂 原 信 生	進化系統研究部門	霊長類(おもにミャンマーの初期真猿類)の進化形態学的研究, ならびに人類学的観点からの古代犬の研究
〃	森 明 雄	社会生態研究部門	島に生息するニホンザルの生態学的・社会学的研究, 重層社会をつくるゲラダヒヒとマントヒヒの社会学的研究
〃	大 澤 秀 行	社会生態研究部門	霊長類の社会変動・社会進化に関する研究, マカク属霊長類の個体群動態と生態・地理的分布に関する研究
東南アジア研究所	山 田 勇	人間生態相関研究部門	地球生態系における生態資源と社会の変容過程の研究
放射性同位元素総合センター	五十棲 泰 人		原子核および原子物理学, 放射線計測学に基づく新しい検出器の開発研究
高等教育研究開発推進センター	林 哲 介	全学共通教育カリキュラム企画開発部門	固体における励起電子挙動の光学的研究
国際融合創造センター	谷 垣 昌 敬	融合部門	産学連携, 膜分離工学, 材料プロセス工学

部局の動き

宇治キャンパスで危機管理への取り組みを実施

宇治地区では各研究所等が協力してさまざまな取り組みを行っているが、平成17年11月から12月にかけて消防訓練や救命訓練を行うとともに、危機管理についての説明会を実施するなど、万一に備える取り組みを実施した。

宇治地区に自動体外式除細動器（A E D）設置

自動体外式除細動器（A E D）が宇治地区研究所本館インフォメーションセンター前に設置された。平成17年11月8日（火）・17日（木）には、宇治市東消防署の指導のもと、人体模型を使いながらの気道確保、人工呼吸、心臓マッサージ、A E Dによる電気ショックなど心肺蘇生法による救命手当の実技指導が実施され、事務部職員47名が参加した。



心肺蘇生法の指導を受ける職員

宇治地区消防訓練を実施



消火器による消火訓練

平成17年12月21日（水）、宇治地区では宇治市東消防署の指導のもとに消防訓練が行われた。当番部局のエネルギー理工学研究所本館3階研究室から出火したと想定し、119番通報訓練、初期消火（消火器および屋内消火栓）訓練、避難誘導訓練など、万一の場合に役立つ基本訓練を行い、あらためて防火に対する意識を高めた。

危機管理（リスクマネジメント）に関する考察と提案について

宇治地区では平成17年12月21日（水）宇治事業場衛生委員会主催により、防災システム研究所山村武彦氏を講師にむかえて「宇治キャンパスにおける危機管理（リスクマネジメント）に関する考察と提案について」の説明会を開催した。宇治事業場における安全・危機管理体制の強化改善を図るための諸事問題点についての指摘と提案が行われ、所長、副所長のほか関連する委員、教職員らが、熱心に聞き入っていた。



危機管理について説明する山村氏

寸言

道草が生んだ世界

神谷 徹



「今日なすべきことを明日にのばすな」という言葉がある。実は、この言葉を聞くとどうも落ち着かない気分になる。なにしろ、これまでの人生で「今日なすべきでないこと」ばかりをやってきたような気がするからである。

とはいえ、人はなかなか「なすべきこと」をする気になれないものだ。かわりに「なすべきでないこと」ならばいくらでもできる。たとえば、テスト前には勉強する気にならず、関係のない小説を読破してしまったなどという経験が誰にでもあるはずだ。

私はふだん、いろんなところでストローの笛を演奏しているのだが、プロフィールを見た人によく訊かれる。

「宇宙物理が専門だったのにどうしてこうなったんですか？」

たしかに自分でも不思議なのだが、結局のところ、こうなったのは数々の道草や寄り道の結果だろう。つまり「なすべきでないこと」を真剣にやりすぎたせいなのである。

むかし、理学部の学生だった頃に、たまたま聞いたレコードで「リコーダー」の魅力を知った。リコーダーというのは、現在では小学校などで使われている「たて笛」のことだが、実は西洋で古くから使われた楽器で、とくに300年ほど前の「バロック音楽」には欠かせない存在なのであった。バッハやヘンデルといった大作曲家も、この楽器のための作品を数多く残しているのである。

もともとバロック音楽が好きだったし、ちょうど大学紛争が盛んな頃で、授業のない期間が長かったせいもあって、すっかりリコーダーにのめり込んでしまった。楽器店で木管のリコーダーを買い求め、本来やるべき理科系の勉強はあまりせずに、ひたすら笛ばかり吹いていたのである。当時の私にとって、この「なすべきでないこと」には抗しがたい魅力があり、「なすべきでない」ゆえなのか、不思議なほど真剣になれるのであった。

卒業するときにも就職のことはほとんど頭になか

った。リコーダーの演奏家になれるのかどうかはまったく分からなかったが、とにかくやれるところまでやってみようと、今にして思えば、ずいぶん無駄なことを考えたのである。はじめのころはもちろん、ほとんど仕事がなかった。だが、音楽教室や講習会などでリコーダーの指導をしているうちに演奏する機会も少しずつ増え、ふとしたきっかけで音楽大学の非常勤講師になることができた。こうして、徐々に音楽家らしい体裁になってゆくのであった。

とはいえ、まだほんの駆け出しである。日々の練習や音楽様式や分析の勉強などは当然「なすべきこと」であつたし、それなりの努力もしていたわけだが、ちょうどその頃、学生たちと一緒にストローの先をつぶして遊んでいたのがきっかけで、ストローの笛の新たな歴史が始まったのだ。

最初は鳴らすだけでも苦心した。いい音は出ないしすぐに疲れる。でも、自分にとってまったく必要のないことだけに、かえって面白かった。そして、毎日やっていると確実に上達するのが嬉しくて、いくらかでも深みにはまってゆくのであった。

十年目くらいに、二本以上のストローを同時に吹いて、メロディーとハーモニーを同時に出せる画期的な楽器を作りはじめた。そしてさらに数年後、予想もしなかった面白い発展を遂げる。息の力で動く楽器が次々に登場したのだ。それも、ただ動くだけではなく、楽器ごとに演奏する曲目を決めて、それぞれの曲にふさわしい動きになるようにしたのである。たとえば「ぶんぶんぶん」ではハチが回る。「さくら」では最後に花が開く。「しゃぼん玉」はしゃぼん玉が実際に出てくるといった具合だ。

そして、この動く仕組みを考えるのは「物理」なのであった。もちろん、たいして複雑な物理ではないが、理科的に考えなければ作れないものだし、これはふだんの音楽活動ではほとんど使えない能力であったから、そのことにも新鮮な喜びを感じた。

今のところ、こんな不思議なストロー楽器で演奏活動しているのは世界でも私だけだと思うが、今後さらにどんな道草をして、いったいどうなつてゆくのだろう。自分でも予想がつかないことだが、ひそかに楽しみにしているのだ。

(かみや とおる リコーダー、ストロー楽器奏者、昭和48年理学部卒業)

随想

時計台記念館の歴史展示室

名誉教授 応地 利明

百周年記念事業によって時計台が大きく改装され、名前も「京都大学百周年時計台記念館」と、長く、いかめしくなった。しかしより身近な存在となり、会議や会合で訪れる機会もふえた。その一角に、



歴史展示室が開設されている。先日訪れたときには、学徒出陣関係の企画展示がなされていた。大学文書館の尽力にもかかわらず、戦没出陣学生の数がなお確定できていないという事実を改めて知った。

昨秋の京都国立近代美術館での須田国太郎展には、人文科学研究所の「発掘」が出品されていた。しかしいまも総長室に掲げられているのであろう「学徒出陣図」はなかった。そのときなぜと思ったが、今回の企画展での出陣が優先されたのであろう。「学徒出陣図」は、光と黒の融合を目ざした氏の画風の典型と思っていた。けれども今回の展示解説で、1943年10月21日の農学部グランドでの壮行式自体が光のないものであった、と語ったという当日の氏の心象を知った。

歴史展示室には、1939年の本部構内の立体模型と1930年ころの学生下宿が復原展示されている。私は1956年の入学だが、この2つの展示はともに学生の頃の記憶にほぼ連なる。戦争をはさむ20数年間は、大学の景観も、学生生活も大きく変化しなかったということであろう。それにしても高度経済成長以前のキャンパスは、学生定員が現在の半数以下という数字が示すように、余裕のある空間であった。

建築景観も、戦前期に営繕課長であった大倉三郎氏が目指した、全体として統一性を保ちつつも学部ごとに個性的なスタイルを表現しようとする新しい建物群と古い赤煉瓦の建物群とが調和を保っていた。それが、1960年代に、打ち放しコンクリートとガラスのモダニズム建築に一変した。今またキャン

パスは再開発の時期を迎え、ある種のポスト・モダン建築に変わりつつある。古い歴史をもちながら、これほどキャンパス景観が変

化していく大学も珍しいのではないか。それが、京都にあって第2世紀に入った大学なのに、重要文化財指定建築が1件もないという残念な結果を招いているのであろう。

一つ希望を述べたい。これからも再開発による高層化にともない、キャンパスには公開空地も設けられていくことだろう。それについて、公開空地は公開裸地ではなく、公開緑地として造成していただきたいと思う。卒業生でもある高田宏氏が、読売文学賞受賞作品『木に会う』のなかで描いたヒマラヤ杉の大木と緑陰を伐採して公開裸地とするようなことは、大学にはなじまない。

歴史展示室の下宿復原も、いろんなことを思い出させてくれる。こちらの方は、1950年代後半とは異なるところもある。たとえばマントはもう着なかったし、座り机よりも椅子式の机が主流であった。日本手ぬぐいも、タオルに変化していた。しかし暖房は火鉢であったし、並べられている本のいくつかはいまも自宅にある。角帽も、入学とともに伸ばしはじめた髪がさまになるまでは、被る者も多かった。

いま昭和30年代を、スローで人間のつながりが実感できた時代として懐かしむ気分が、とくに団塊の世代を中心にあるようである。しかし学生・院生として同時代を過ごした私などには、同様の気分で懐かしむ一面もあるが、なにか氷雨降る夜が続いていたような閉塞感覚も強い。当時の京大は学生運動も盛んであったが、たしか日本で自死率ももっとも高い大学であったのではないか。私の周辺にも、それを選んだ人が何人かいた。学生運動と自死は、時代の氷雨感覚を介して表裏一体であったように感じる。同じ時代であっても、世代によってそれへの感覚・印象が異なるのは現在だけではないのであろう。

(おうじ としあき 元アジア・アフリカ地域研究研究科教授 平成12年退官 専門は地域研究)

洛書

思いもよらぬこと

森本 幸生

思いもよらぬこと,, , 舌打ちしたくなる事が多々ある。自分は小さいときから小心者で、遠足の前の日、遠足の楽しみを想像するのを通り越して、みんなが集まる朝の集合場所（これが日ごろ行ったこともない最寄の私鉄の駅だったりする）へ行くための手段に気が移ってしまい頭がいっぱいになってしまう。そのためあれこれ考えて眠れなくなり、あげくに翌朝寝過ごしてバタバタと姉に車で送ってもらうことになったりする。得てしてこんな時に肝心の遠足用のおやつや弁当などを忘れてりする。まるでサザエさんのカツオのようなものである。おそらくみんなこのような幼少期(?)を経て大事な時にへボをしないよう訓練されていくのであろう。

私も実験屋の端くれなので、何事によらず準備を整えて事に挑むことはいいことだと思っている。古い話で恐縮だが、今から8年ほどまえフランス・グルノーブルにある欧州大型放射光施設で実験する機会を得た。私は専門がタンパク質結晶学で、結晶を仕込んだ容器を携えたまま十数時間の旅行することになった。ところがこの容器というのが24ウェルの細胞培養用プレートで、各ウェルには結晶成長させたタンパク質溶液を逆さまにぶら下げるようにしてカバーガラスで蓋がしてある。早い話が振動や激しい動きは厳禁である。以前からこのような状態で結晶を運ぶときには、電車やバスではひざの上、交差点は走って渡らない、と気をつけていた。このフランス行きでも当然同じように持っていくことを決意し、この容器を20枚近くそっと積み上げ手提げ紙袋にしまいこんで出発した。

フランスは初めてだったので楽しみであった。出発当日大きな海外用ボストンとマックを入れたリュック、それに片手には結晶プレートを積み込んだ縦長の手提げ紙袋、という格好で空港まで行った。当



然手提げ紙袋は機内持ち込みにしアテンダントから頭部バケットに入れるよう促されながらも、それを断り足元に大事に立てて置いて離陸した。BA機だったので経由地ロンドンヒースロー空港までの10時間近く、特に大きな揺れもなくワインなどを飲みながら快適であった。ヒースローで約2時間のトランジットでいよいよヨンに向けての出発となった。乗り換えのために再度手荷物検査などを行うことになって、コトが起きた。

金属探知ゲートをくぐる時、検査官は若い愛想の悪いしかめっ面をした女性であった。あまり面白くもない日本人が通るので会話もなく黙って透視装置の作業をしていた。その時私の大事な紙袋を、寝かせて、透視装置に通そうとしたのである（考えてみれば当たり前である）。猛然(?)と抗議した。「立てたまま通して欲しい」いろいろやり取りの後、彼女は不承不承立てたまま通してくれることになった。安心して先にゲートをくぐって紙袋を持った。透視装置のトンネルをくぐり出口にぶら下げた黒いゴム製の短冊のようなカーテンが、ぱらっとめくれて見慣れた日本語の書いてある紙袋が出てきた。手を差し出したとき,, , パタ!,,, , そのおそらく結構硬いであろう短冊になぎ倒されてしまった! たぶん私の顔から血の気が引いたのであろう、透視装置の向こうにつたっていた彼女が、本当に、とてもうれしそうな顔をして、にっこり笑っていた。何ヶ月もかけて大学院生とともに調製した結晶は全滅であった。その後はリヨンから力なくバスに乗りグルノーブルの田舎町についた。6月であった。98年のフランスワールドカップの時でも研究所でもランチや宿舎の夜のTV前は大盛況であった。7月下旬に開催地フランスが優勝して、普段は行儀のよいフランス人の学生たちが自動車のハコのりをして研究所の敷地内を走りまわっていた。一緒になってはしゃぐわけにもいかず、彼らを眺めながらひたすら結晶化を行った。準備万端は大事なことであ

る,, , 思いもよらぬ楽しいひと夏を過ごした。
(もりもと ゆきお 原子炉実験所教授、専門は蛋白質結晶学)

保健コーナー

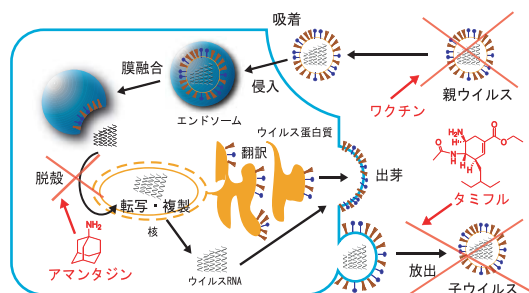
鳥インフルエンザの脅威

藤井 信孝



人獣共通感染症として鳥インフルエンザ（H5N1型）の脅威が報道され、話題になっている。歴史的に見ても1918年のスペイン型、1957年のアジア型、1968年の香港型、1977年のソ連型で世界的大流行を起こし、多数の死者が出た。インフルエンザウイルスに感染するとその抗体を獲得するが、インフルエンザウイルスは変異を繰り返し、その抗体が役に立たない為流行を繰り返す。H5N1型ウイルスは高病原性で、人類はこれに対する抗体を持っていないケースが多いことから世界的大流行が危惧されている。感染が主に起こる気道粘膜にはIgAが多く産生されているが、予防接種により獲得できる抗体はIgGである。予防接種により完全に感染を阻害することはできないが、重症化を防ぐ意味でも予防接種は有効であると思われる。

インフルエンザウイルスは、宿主細胞由来の脂質二重膜よりなるエンベロープに包まれており、その表面にスパイク構造状の糖タンパクHA（ヘマグルチニン）、NA（ノイラミニダーゼ）が存在する。HAには15の、NAには9の亜型が存在する。過去の世界的大流行は人獣共通感染ウイルスの遺伝子の最集合による変異が原因とされている。HAには5つの抗原認識部位があり、これらを形成するアミノ酸が変異を起こし、それが積み重なると今までに獲得した抗体が役立たなくなる。毎年のようにインフルエンザが流行するのはこのためと考えられる。ウイルスが細胞表面の糖タンパク末端のシアル酸という糖鎖構造を認識して結合し、エンドサイトーシスという機構で細胞内に侵入した後に、HAは蛋白質分解酵素によりHA1とHA2に加水分解されて初めて感染能力を獲得する。加水分解部分のアミノ酸配列により弱毒型と強毒型に分けられる。通常分離される弱毒株ではHA1とHA2のつなぎ目には塩基性アミノ酸であるアルギニンが1つ見られるが、細胞内にはそれを切断する蛋白分解酵素は少なく、非感染性粒子として産生され、粘膜上皮細胞上にトリプシン様蛋白分解酵素がある場合のみ感染が広がる。



インフルエンザウイルスの感染が気道に局限するのは、同部位に蛋白分解酵素が局在するからである。一方、強毒株のHA1とHA2のつなぎ目に二つの塩基性アミノ酸（アルギニンとリジン）が連続してみられ、細胞内に普遍的に存在するフリンという蛋白分解酵素により切断され、HA1とHA2に開裂する。したがって、どの細胞に感染してもこの種のウイルスはすべて感染性が強く、全身感染症を引き起こす。

一方インフルエンザ治療薬としてはウイルスが宿主細胞に侵入後脱殻段階で阻害するアマンタジンや宿主細胞内で複製して出芽する段階でNAを阻害するタミフル等が臨床応用されているが、これらに耐性を示すウイルスの出現を如何に克服するかが問題である。鳥インフルエンザ研究では昨年二つのブレークスルー的研究論文が発表された。一つは1918年のスペイン風邪ウイルスゲノムの完全解読であり、もう一つはアラスカの永久凍土に凍結されていた犠牲者の肺細胞から同ウイルスが復元され、マウスに感染させてその強毒性を再現する実験が行われたことである。感染一日後および4日後のウイルス粒子放出量はそれぞれ、通常の50倍および約4万倍であった。また感染したマウスはすべて6日後に死亡している。昨年、化学療法剤の使用にも関わらずインフルエンザで死亡した2人の若いベトナム人女性から、NAにアミノ酸置換があり、タミフルに対して強い抵抗性を示すインフルエンザA（H5N1）ウイルスが同定された。またこのウイルスが人から人へ感染したケースも報告されている。一日も早くウイルスゲノムの完全解読を基盤にして画期的な化学療法剤やワクチンが創出されることを切望する次第である。筆者らはゲノムとケミストリーの融合を基盤とする新興・再興ウイルスゲノム情報収斂型創薬研究の一環としてHIV侵入阻害剤の分子設計概念の応用を試みている。

（ふじい のぶたか 大学院薬学研究科 教授、専門は医薬品化学）

訃報

このたび、^{たなかまさと}田中昌人名誉教授、^{すなもとじゅんぞう}砂本順三名誉教授、^{いけがみていぞう}池上禎造名誉教授、^{はやし}林^{みなお}巳奈夫名誉教授、^{おちたけおみ}越智武臣名誉教授、^{おくがわ こうたろう}奥川 光太郎名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

田中 昌人 名誉教授



田中昌人先生は、平成17年11月18日逝去された。享年73。

先生は、昭和29年京都大学教育学部を卒業、同大学教育学部助手を経て、同31年大津市立南郷中学校近江学園分校教諭、同39年滋賀県立近江学園指導係長に任ぜられ、精神発達に関する研究チームを組織、妊娠中毒症などと発達障害との因果関係を調査研究された。昭和41年日教組の教研集会・心身障害児教育分科会を契機に、同42年全国障害者問題研究会が結成され、その初代全国委員長として活躍された。

昭和45年京都大学教育学部助教授となり、同58年8月教授に任ぜられた。平成7年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。退官後は平成8年から平成15年3月まで約7年間にわたり

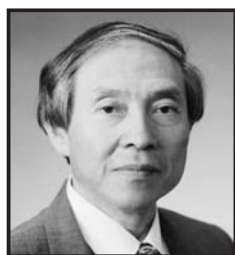
龍谷大学文学部教授、平成15年まで同大学大学教育開発センター・センター長を務められた。

先生の専攻分野は教育心理学、教育指導論、発達診断学、発達保障論、障害者教育学であり、研究テーマは、発達における内的合法則性の科学的解明（「可逆操作の高次化における階層－段階と発達保障の階梯に関する理論」）、および、日本における発達の概念の導入についての歴史的研究に従事された。

また、先生の所属学会・団体は、大学評価学会（共同代表）、日本教育学会、日本心理学会、日本教育心理学会、関西教育学会、関西心理学会、日本霊長類学会、日本応用心理学会、全国障害者問題研究会で、中でも日本応用心理学会の会長、全国障害者問題研究会の顧問を務めることにより、学会の発展に貢献された。

（大学院教育学研究科）

砂本 順三 名誉教授



砂本順三先生は、平成17年12月6日逝去された。享年69。

先生は、昭和33年同志社大学工学部工業化学科を卒業、同大学大学院工学研究科博士課程単位修得退学の後、九州大学工学部助手、助教授を経て同48年長崎大学工学部助教授、同50年教授となり、昭和63年京都大学工学部教授に就任、高分子材料化学講座を担当された。平成11年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、平成11年4月から同14年3月まで

新居浜工業高等専門学校校長を務められた。

先生は分子集合体、中でもリボソームに関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、化学と医学の融合分野において多大の貢献をされた。主な著書に『リボソーム』、『高分子と医学』等がある。

先生は日本化学会や日本バイオマテリアル学会などにおいて要職を歴任された。また、一連の研究活動により、日本化学会学術賞（昭和61年4月）をはじめ多くの賞を受けられた。

（大学院工学研究科）

池上 禎造 名誉教授



池上禎造先生は、平成17年12月14日逝去された。享年94。

先生は、昭和8年京都帝国大学文学部（国語学・国文学専攻）を卒業、同学部副手、同13年第三高等学校講師、同教授を歴任、昭和24年新学制移行にともない京都大学教授（分校勤務、同29年教養部発足後教養部教授）となられ、その後同40年大阪大学に転出され、同49年停年退官後、両大学の名誉教授の称号を受けられた。

先生の専門分野は、国語学・国文学であり、若き日の、古代日本語の母音組織が母音調和の現象を占

むものであるという発見は、今日「有坂・池上の法則」として広く知られる。その後の先生の研究は、日本語の全体に広がり、中でも主著『漢語研究の構想』（岩波書店、昭和59年）に結実した漢語研究、戦後を対象とした言語生活の研究は、それまで未開拓の分野を切り開いたものであり、後進の研究のまたとない指標となった。

その高く広い言語学的識見と確実な実証的研究は、先生の講筵に列した者の深く敬慕するところであった。そして、専門家のみならず、京都大学の教養教育を通して、多くの人が、先生の母語、日本語への愛を学んだ。

（大学院人間・環境学研究科）

林 巳奈夫 名誉教授



林 巳奈夫先生は、1月1日逝去された。享年80。

先生は、昭和25年京都大学文学部史学科を卒業、同大学大学院文学研究科研究奨学生、平凡社（株）編集部を経て、同32年京都大学人文科学研究所助手、同43年助教授、同50年教授に就任され、東洋考古学部門を担当された。平成元年停年により退官され、名誉教授の称号を受けられた。

先生は、中国考古学と古典籍に対する深い学殖に加え、図像学・民族学・動物学などの新しい方法を用いた実証的研究によって、東洋学の多くの分野において数々の顕著な業績をあげられた。第1に、中国古代文明を特徴づける青銅器や玉器について、中国・日本・欧米の収蔵品を再発掘するとともに、その精細な観察を積み重ね、細緻にして体系的な編年を確立された。第2に、紀元前2千年紀の殷代に出現する馬と馬車について、発掘された馬骨や青銅製

車馬具、古典籍や甲骨・金文の分析を軸に、欧米における動物学・民族学の成果と中央アジアにおける遺跡調査の経験とを生かした分析を進め、汎ユーラシア的な観点から中国の古代文明を世界の文明史の流れの中に再措定することに成功された。第3に、生活の諸相や神話的世界を表現した画像石・壁画・鏡などについて、図像の姿態や配置を精密に分析する新しい図像学の手法を開拓し、古代の生活史・精神史の分野で先導的な役割を果たされた。第4に、青銅器の器形・文様・銘文を総合的に分析するための目録や、古代の生活と風俗の諸相を網羅した文物図典を編纂された。それらは考古学のみならず文献史学や民俗学の分野における研究の基礎条件を整備したものとして、国内外できわめて高く評価されている。

これらの業績に対し、昭60年日本学士院賞が授けられ、同年ドイツ考古学協会海外会員、平成16年日本学士院会員に選出せられている。

（人文科学研究所）

越智 武臣 名誉教授



越智武臣先生は、1月10日逝去された。享年82。

先生は、昭和23年京都大学文学部史学科を卒業後、文学部助手、講師を経て昭和34年に助教授、同45年に教授に昇任、西洋史学第一講座を担当された。昭和62年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。その間、昭和44年に京都大学文学博士の学位を受けられた。また昭和62年から京都橘女子大学文学部教授となり、平成元年から同4年まで同大学学長を務め、同8年停年により同大学を退職された。

イギリス近代史を専攻された先生は、その大著『近代英国の起源』において、近代イギリスの政治、社会、文化の担い手が、人文主義的教養理念を備えた地主＝ジェントリ層であったことを解明された。本書は日本の戦後西洋史学におけるイギリス近

代史の見方を大きく転換させることになった画期的業績である。このほか、先生は大航海時代のヨーロッパ史についても重要な業績を残された。岩波書店より刊行された『大航海時代叢書』の編集委員として先生は『イギリスの航海と植民（一・二）』を担当され、同書の「解説」として、16世紀イギリスの海外進出の経緯およびその社会的推進力の所在を詳細に分析した論文を執筆された。これらはわが国において未開拓に近かったこの分野の研究の出発点となる、貴重な業績である。

このように先生は四十数年にわたって西洋史学の教育・研究にたずさわり、該博な知識と独特の歴史感覚によって学生・大学院生に大きな影響を与え、その薫陶のもとに多数のすぐれた研究者が育成された。これらの功績により平成13年4月に勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院文学研究科)

奥川 光太郎 名誉教授



奥川光太郎先生は、1月18日逝去された。享年93。

先生は、昭和10年京都帝国大学理学部を卒業後、同大学大学院に進学、同11年から同大学理学部、第三高等学校、

奈良女子師範学校の各講師嘱託、同17年第三高等学校教授、同24年京都大学理学部助教授兼任、同25年同大学分校教授、同38年同教養部教授を経て、昭和43年12月京都大学工学部教授に就任された。以後7年余りにわたり工業数学第2講座を担当され、基礎数学と応用数学を学ぶ多くの学生を育てられた。昭和51年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和40年4月から同42年3月まで京都大学評議員、同41年7月から同年8月まで教養部長事務代理を務められ、大学の管理運営に貢献された。本学退官後は京都産業大学

教授、同大学理学部長として大学の発展に尽力された。

先生の専門は代数学であり、代数幾何学、微分代数および応用代数分野で活躍された。とくに微分代数分野では、コルチンが標数0の微分体の場合にピカル・ベッショ理論の現代化をはかり、さらに一般化したガロア理論を確立したのを受け継ぎ、一般の正標数に対して、同じくピカル・ベッショ理論とガロア理論への対応理論を樹立され、当該分野での礎を構築された。著書として「数理統計学概説」「線形代数学」など巾広く多数の良書をだされたが、とくに「応用抽象代数学」では、抽象代数学の工学への統一的導入を試みられ、符号構成法における新しい知見も示された。

これら一連の功績により昭和61年4月に勲二等瑞宝章を受けられた。

(大学院情報学研究科)

話題

総合博物館 平成17年秋季企画展6,500人を突破

総合博物館では、平成17年秋季企画展「日本の動物はいつどこからきたのかー動物地理学の挑戦ー」の入館者が平成17年12月17日（土）、6,500人を突破し、記念セレモニーが行われた。同日午後、入館者として通算6,500人目となったのは奈良県から祖母と一緒に京都を訪れた河田大樹君（写真左）。同館の中坊徹次館長から記念品として、企画展図録等が贈呈された。本企画展は、進化を軸に動物の多様性を体系的に把握する動物地理学の面白さ、大切さを貴重な標本とともに広く社会に紹介するもので、平成17年9月28日(水)～1月22(日)まで開催された。



中坊館長から記念品を贈られる河田君（左）

フィールド科学教育研究センター時計台対話集会
「森と川と海の対話ー安心・安全な社会を求めて」を開催

平成17年12月18日（日）に時計台記念館百周年記念ホールにおいて、フィールド科学教育研究センター時計台対話集会「森と川と海の対話ー安心・安全な社会を求めて」が開催された。第2回となる今回は、日本の森の再生を求めて自らも「アファンの森」創りを進めているC.W. ニコル氏による「森を育てて海を想う」、日本の河川の再生に向けて活躍している天野礼子氏による「“川仕事”も“森仕事”も」、「森は海の恋人」運動を精力的に推進する牡蠣の森を慕う会代表畠山重篤氏による「汽水に生きる」、そして尾池和夫総長による地震学者の立場からの「地球社会の共存」の講演の後、日本経済新聞編集委員土田芳樹氏のコーディネイトによる会場と講演者による対話が行われた。

この対話集会は、森と川と海のつながりに人と自然の共存原理を求める新しい統合科学「森里海連関学」の創生を追求するフィールド科学教育研究セ



ンターの活動の一環として実施されているものである。安心・安全な社会の再構築は現代社会の大きな関心事であり、その重要な自然的基盤となる森と川と海のつながりについて考えてみようとの呼びかけに、参加者は350名におよんだ。次世代を担う高校生・大学生・大学院生の参加者も多く、若い人々からの発言も活発で、実りの多い対話集会となった。

（フィールド科学教育研究センター）

京都大学未来フォーラム（第20回）を開催

平成17年12月19日（月）に時計台記念館・百周年記念ホールにおいて、恒例となった未来フォーラムの第20回目が開催された。今回は、卒業生で名誉教授の佐藤幸治先生を招き「21世紀の日本の司法について－裁判員制度の導入に関連して－」というテーマで講演が行われた。

佐藤先生は、はじめに明治憲法下の司法の状況等の歴史を語られ、続いて、第二次世界大戦後に制定された現憲法では、・個人の尊重、・政治の復権、・法の支配、・平和主義の四つの柱で構成されていることにふれ、新憲法は制定されたが「人間の意識や行動はそうは簡単に変わらなく戦前の意識が長く続いていた」ことを指摘された。また、2001年から始まった司法制度改革審議会では、21世紀の日本を支える司法の姿として、国民にとって、・身近でわかりやすい司法(FAMILIAR)、・頼もしく、公正で力強い司法(FAIR)、・利用しやすく、速い司法(FAST)を目標に、司法制度改革の三つの柱として、第一に「国民の期待に応える司法制度を整備する」、第二に「人間味のある優れた法曹が身近に存在する」、第三に「国民が参加し、国民によって支



えられる司法にする」を目標に審議を行ったことを紹介され、3年後に施行される裁判員制度は、国民が自主性をもって、裁判官とともに裁判の内容に主体的かつ実質的に関与する制度であり、司法制度改革の確実な実現のために、皆さんの知恵と勇気で改革を推し進めましょうと語りかけられた。

集まった190名の参加者は、メモをとりながら真剣に聞き入っていた。また、質疑応答では、裁判員制度などについて質問があり、有意義なフォーラムとなった。

日誌 2005.12.1 ～ 12.31

12月 5日 役員会

6日 部局長会議

〃 ベトナム, Tran Van Minh フェ農
林大学長 他1名, 総長他と懇談

7日 能楽鑑賞会

8日 企画委員会（第13回）

9日 学生部委員会

12日 役員会

13日 財務委員会（第13回）

14日 全学共通教育システム委員会

15日 図書館協議会（第3回）

19日 役員会

20日 教育研究評議会

〃 財務委員会（第14回）

〃 企画委員会（第14回）

21日 国際交流委員会

26日 役員会

27日 大学入試センター試験実施委員会

医療技術短期大学部の動き

平成18年度専攻科助産学特別専攻入学者選抜試験を実施

医療技術短期大学部では、平成18年度専攻科助産学特別専攻の入学者選抜試験を1月6日（金）に実施し、その合格者を1月13日（金）に発表した。

受験者数、合格者数および入学者数は次表のとおりである。

区分	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
助産学特別専攻	20	96	92	20	20

お知らせ

21世紀 COE プログラム 公開シンポジウム 「やさしい先端経済分析～先端理論による経済システムの解剖～」

1. 日 時：3月1日（水） 13：00～17：40
2. 場 所：時計台記念館 百周年記念ホール
3. プログラム：

開会挨拶

経済学研究科長 西村 周三

基調講演 「京都大学が拓く先端経済分析」

経済学研究科教授 吉田 和男

講演 ブロードバンドが拓く新しい公共サービス

経済学研究科助教授 依田 高典

投機行動と株価変動－Herding 理論からのアプローチ

経済学研究科助教授 岩城 秀樹

政策プログラム効果の推定と検定

経済研究所教授 西山 慶彦

市場経済移行論のフロンティア：ロシア・東欧における体制転換の教訓を考える

経済研究所教授 溝端佐登史

交通混雑の経済分析

経済学研究科助教授 文 世一

4. 定 員：500名

5. 受 講 料：無料

6. 申 し 込 み：不要

7. 問い合わせ先：京都大学大学院経済学研究科COE研究補助員室

TEL：075-753-3452 E-mail：coe-jimu@econ.kyoto-u.ac.jp

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/coe21/symposium/2006/21COESymposium-2006.3.1.html>

河上肇記念講演会

『不平等問題の経済学—『貧乏物語』の現在』

1. 日 時：3月29日（水）17：15～20：15
2. 場 所：時計台記念館 百周年記念ホール
3. プログラム：

講演 現代日本の不平等問題 経済学研究科教授 橘木 俊詔
平等問題の運命：自然史的考察 「Equality's Fate: A Natural History」
サミュエル・ボールズ教授（サンタフェ研究所／シエナ大学／マサチューセッツ州立大学）
Prof. Samuel Bowles (Santa Fe Institute/Universita degli Studi di Siena)
(通訳つき)

4. 定 員：500名
5. 受 講 料：無料
6. 申 し 込 み：不要
7. 問い合わせ先：京都大学大学院経済学研究科COE研究補助員室
TEL：075-753-3452 E-mail：coe-jimu@econ.kyoto-u.ac.jp
詳細はホームページをご覧ください。
<http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/coe21/symposium/2006/kawakami-2006.3.29.html>

大学文書館企画展

京都大学における「学徒出陣」

1. 会 期：1月17日（火）～3月5日（日）
2. 会 場：時計台記念館1階 歴史展示室（入場無料）
開室時間 9：30～17：00 休室日 2月6日（月）
3. 問い合わせ先：京都大学大学文書館
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL：075-753-2651 FAX：075-753-2025
詳細はホームページをご覧ください。
<http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/index.html>

編集後記

大学の運営は、教員に委ねるのではなく総力で対処するマネジメントであり、事務職員もプロ意識で積極的に大学の意思決定に参加し、物事に速やかに柔軟に対応しなければならない。

事務改革により少数精鋭で行かなければならなくなった今日この頃、広報についてもこのような意識改革も必要な気がしている。